

随分遣つたものらしい、舞臺効果を揚げる爲めには、少しのこだわりもなく相談づくでやつたものだ、開けたものである。

彌太夫は文化十一年生、明治元年三月十九日、五十五歳で死歿。

大兵大力の春太夫 (五代目)

湯屋の三助から櫓下まで

文化五年、堺の鍛冶屋町に生れ、明治十年七月二十五日、七十歳で死んだ、煙草庖丁鍛冶の子。若い時は角力が好きで、素人角力の大關にまでなつたことがある。

二十一二歳の頃、大阪へ流れて来て、随分身を持ち崩し、天満の靈府の附近の湯屋の三助になつて稼いでゐるうち、暇をぬすんで好きな淨瑠璃を四代目氏太夫に教はつた。たゞこれだけの経歴だが、これが後に淨瑠璃の大本山、天下の文樂座の櫓下の榮位に登らうとは……………である。

大まかなあの藝風はこの人の性格まる出しで、平生頗る大度量な洒落なところがあつて、始終、芝居の樂屋や表方の連中を大勢引連れて茶屋や料理屋へ押しかけた、本町橋のある料亭では、一時に百五十人前の鰻井を注文されて面喰つたといふことだつた。

春太夫の妻は梅園と號する畫家で、一方明清樂の師匠をしてゐたやうな人だから馬鹿に氣位の高い女で、常に『夫は藝人だが私は先生だ』と誇つてゐたので、春太夫は無條件に己れの妻を『先生々々』と呼んでゐた。



竹本春太夫の像

春太夫が末期の時、妻の梅園は死に直面した夫の顔を寫生しやうとした、ふと眼を開いた太夫は『なるだけ男ぶりに描いてくれ』と注文した。（此畫像は攝津大掾家に所藏されてある。）

身の丈四尺一寸の着物を被た。六十一歳の還曆祝の時に袴を着て四斗俵をかるぐと差し

上げたそうだ。

越路（攝津大掾）や大隅が、役不足で往々江戸へ奔らうとするのを克く看破して、江戸に就て學ぶべきの師なし、大阪でなければ本當の藝は磨かれないと、屢々訓戒を加へた、それで二人ともに遂に大阪に踏み止まつたといふ話もある。

文藻の染太夫（六代目）

三十冊の自叙傳

寛政十一年生、明治二年四月三十日、七十二歳で死歿。三代長門の跡を繼いで文樂座の櫓下となる。

時代物の名人で、濃厚篤實、細心周到の性、自叙傳三十冊を残してゐる。當時の風俗、行事、時事の巷説、山水の景勝、旅行記事、が趣味的に記されてゐて、自筆の挿畫や、高山植木の標本などを貼付してある。四代長門の淨瑠璃大系圖と對比して、これは隨筆的な興味に於て溢れてゐる。